

米国の大統領選

来月の3日の投票が迫った「米国の大統領選」。

何としても“再選”を勝ち取りたい花札大統領に対し、政権奪還を狙う民主党「売電」候補。どちらも高齢で、当選しても今後4年間の任期に耐えられるのでしょうか。



今のところ、マスコミ調査？では、売電候補が10ポイント近くリードしているとのこと。それはそうでしょう。言いたい放題、やりたい放題の現花札大統領に米国民も愛想をつかした、と思うのですが、どうもそうでもないようです。

引用写真

前回の選挙の際も、「とらんぷ勝利」を予想しなかった米国のマスコミと多くの知識人。その実「隠れとらんぷ」という存在が勝敗を大きく分けた。国の数パーセントの富裕層が、国家資産の90%以上を所有しているという異常。これに怒りを覚えない国民はいないとも思うのだが。花札大統領は、そんな国民感情をうまくつかんだのか。

今回は、劣勢が伝えられる中、形振り構わない花札大統領とその支持者たち。郵便投票を無効と訴訟を起こしたり、インチキ投票箱を設置したり、武装集団が暗躍したりと、これが民主国家での許される行為かと、疑ってしまいます。

米国は、間違いなく「保守・内向」に向いていますね。かつての「資本主義の覇者」、理想の「民主主義国家」とは、すでに形骸化した過去の遺物になってしまった。世界を米国を「分断」しかねない、いわば独裁候補。隣国もさらに強烈な独裁者に牛耳られている。

それでも、日本にとってみれば、隣大国に強硬手段に出られる花札大統領がよいのかという気もしますが、どうでしょうか。

欧州では、理想とされた「EU構想」が、やはり歯の抜け落ちるように、崩壊しかかっている。加えて、「新型コロナ」という「見えない脅威」に脅かされる世界。

こういった「不確定性」の時代には、より強権な「独裁者」が求められるのでしょうか。

2020年10月末